

『妖精の女王』第1巻における「神聖」

奥西豊子

序

『妖精の女王』(*The Faerie Queene*)は、エドモンド・スペンサー(Edmund Spenser)による英国ルネサンス文学の有名な物語詩であり、全6巻と断章からなる¹。1590年出版時の題名は、*The Faerie Queene. Disposed into twelue books, Fashioning XII Morall vertues*である。このタイトルからも分かるように、『妖精の女王』においては、「徳」‘moral virtue’がテーマであり、それぞれの巻で、主人公の騎士が、その巻のタイトルに示される‘moral virtue’を体現することになっている。第1巻の主人公たる騎士は、赤十字の騎士、イングランドの守護聖人である聖ジョージである。第1巻の副題が、*THE FIRST BOOKE OF THE FAERIE QVEENE. CONTAYNING THE LEGEND OF THE KNIGHT OF THE RED CROSSE, OR OF HOLINESSE*であることから、第1巻のテーマは、「神聖」‘holiness’である。第1巻のテーマであることから、「神聖」が諸テーマの中でも重要なテーマであることは、明白である。しかし、‘moral virtue’として考えた際、「神聖」というものはやや異質である。中世以来、徳としては、三対神徳「信仰」「希望」「愛」と、四つの枢要徳「節制」「正義」「賢明」「剛毅」などがあげられる(マール 29)。実際、第2巻以降でのテーマは、「節制」「貞節」「友情」「正義」「礼節」と概ね、「徳」の範疇にはいるものと考えられる。この第1巻のテーマである‘holiness’とは何を示すのか、検討することは、意義のあることと思われる。

第1巻は、赤十字の騎士である聖ジョージが、貴婦人ユーナに選ばれ、彼女の両親の治める王国を悩ますドラゴンを退治することが軸となる。だが、その途中で、赤十字の騎士は、魔術師アーキメイゴーの罠にはまり、仕えるべき貴婦人ユーナを捨て、魔女デュエッサの誘いに乗り、「高慢の館」(house of Pride)に逗留し、ついには、デュエッサと快楽に耽っているところを巨人オーゴリオに襲撃され、地下牢に監禁される。この後、赤十字の騎士は、ユーナの願いにより、まだ王子であるアーサーに救われ、「神聖の館」(house of Holiness)での改悛と学びを経て、最終的に、「天

¹ 『妖精の女王』は、1590年に1・2・3巻のみで、1596年に4・5・6巻を加えた版で、出版された。それぞれの巻は、全12の歌(Canto)からなる。

の恩寵」(heavenly grace)の下にドラゴンを倒す。そして、赤十字の騎士とユーナの婚約をもって話が締めくくられる。これが大まかな流れである。上記のような経緯を経ることから、ジョン・N・キング(John N. King)に代表されるように、赤十字の騎士が、聖人であると同時に罪人であり、人間を罪深い存在とするプロテスタンティズムが表れている、改革派による聖人性の再定義になっているとの論が多い。また、アンドリュー・キング(Andrew King)は、この第1巻は、中世のイギリスのロマンス *Bevis of Humpton* にのっとったもので、カルヴァン主義的予定説とイギリスの宗教改革のプロテスタント的歴史解釈を、ドラゴン退治を通して語ったと指摘している(King 127-59)。また、竹村はるみは、「スペンサーが第1巻の執筆に着手した1570年代後半、聖人としての聖ジョージ像は形骸化」(27)しており、「聖ジョージが纏うに至った騎士道ロマンス色を取り除き、聖人としての特性を今一度回復する」(27)「聖人伝のプロテスタント主義的書き直し」(32)であるとの指摘をしている。第1巻の赤十字の騎士を、カルヴァン主義的に解釈することは、妥当だと思われる。

ただ、ここで注目したいのが、第1巻において「神聖」と形容されているものは、二つあることである。まずは、赤十字の騎士。副題において“*THE KNIGHT OF THE RED CROSSE, OR OF HOLINESSE*”と明言されているのに加え、“*The Patrone of true Holinesse*”(i Arg.1)とも書かれている²。二つ目は「神聖の館」“*house of Holinesse*”(x Arg.2)である。ジェームズ・W・ブロードダス(James W. Broaddus)の指摘では、カトリック的「神聖の館」の登場人物は、教皇制度におけるサタンの働きを示すアーキメイゴ、デュエッサ、オーゴリオ同様、ローマ・カトリック教会に属する(578)。となると、イングランドの守護聖人たる、赤十字の騎士が体現する‘holiness’と「神聖の館」の‘holiness’とは同じ物と考えて良いのだろうか。そこで本論では、赤十字の騎士の遍歴を確認しながら、赤十字の騎士の体現すべき‘holiness’とは何なのか、考えてみたい。

I

まずは、赤十字の騎士がどのような人物として設定されているかを具体的に検討していきたい。第1歌の冒頭における、赤十字の騎士の紹介は、彼が持つべき性質を示唆すると考えられる。彼は、ユーナから授けられた武具を身につけている。この武具は、*Letter to Raleigh*³において、

² 以下、*The Faerie Queene, Letter to Raleigh* の引用は Routledge 版による。

³ 1590年版の『妖精の女王』に載せられた、コーンウォール州長官ウォルター・ローリー卿(Sir Walter Raleigh)宛てのもの。『妖精の女王』の構想が記されている。

“the armour of a Christian man specified by Saint Paul v. Ephes.” (717; line 64) と書かれているのだが、聖書の「エフェソの信徒への手紙」6章 10-17 節にある「神の武具」のことであり、神の恩寵を示すとされている。武具の描写としては、胸と盾に “a bloodie Crosse” (i 2.1) の模様があるとされている。赤十字の騎士が十字を身に帯びる理由は、十字が “The deare remembrance of his dying Lord” (i 2.2) であり、“For whose sweete sake that glorious badge he wore, / And dead as liuing euer him ador’d” (i 2.3-4) と説明されていて、盾に十字架をつける理由は、“For soueraine hope, which in his helpe he had” (i 2.6) と書かれている。作品内において、この十字を帯びた武具には神の加護があるとの記述が多々見られる。第2歌で、赤十字の騎士と戦うサラセン人サンズフォイは、“That keepes thy body from the bitter fit” (ii 18.24) と、十字架が重傷を防ぐとの発言をしている。実際、対戦時に “hisshield, from blame him fairely blest” (ii 18.9) と書かれている。また、魔女デュエッサも、赤十字の騎士が “a charmed shield, / And eke enchanted armes, that none can perce, / Ne none can wound the man, that does them wield” (iv 50.5-7) を帯びていると言及している。以上から、ユーナを介して授けられた赤十字の模様の武具は、神の恩寵を示す神の武具であり、その武具を帯びている騎士を守る働きがあると考えて差し支えないであろう。

また、冒頭の描写において、赤十字の騎士は、“Right faithfull true he was in deede and word” (i 2.7) と書かれている。騎士が ‘faithful’ であることは、三つの章の要旨においても言われている。

“To sinfull hous of Pryde, Duessa / guydes the faithfull knight” (iv Arg. 1-2)

“The faithfull knight in equall field / subdewes his faithlesse foe” (v Arg. 1-2)

“Her faithfull knight faire Vna brings / to house of Holinesse” (x Arg. 1-2)

各章の要旨は、筆者による定義づけと考えられるので、赤十字の騎士は ‘faithful knight’ であるべき存在と思われる。

この ‘faithful’ であることを考える際に、他に ‘faithful’ である存在として書かれているものについて検討してみたい。第6歌で、ユーナを助けた騎士サティレインは、“Plaine, faithfull, true, and enemy of shame” (vi 20.7) と描写されている。他にも ‘faithful’ な騎士が存在することから、「神聖」を体現する騎士は、‘faithful’ だけでなく、ユーナに選ばれし騎士であることが重要であり、また必要であることがうかがえる。また、第3歌

にて、ユーナが出会うライオンも、重要な示唆を投げかけられると思われる。イングランドの国章でもあるライオンは、高貴な動物としての側面と、七つの大罪、特に傲慢・憤怒と結びつけられる側面との二面性を持つ。作品内のこのライオンは、現れた当初は、七つの大罪の *Avarice* に関連する ‘greedy’ で形容されている。“Hunting full greedy” (iii 5.3) の状態であり、ユーナを見つけると、“greedily” (iii 5.5) に走ってくる。しかし、ユーナに近付くと、心が静まり、“His bloody rage aswaged with remorse, / And with the sight amazed, forgot his furious force” (iii 5.8-9) となり、さらに、ユーナに従う。“Whose yielded pride and proud submission” (iii 6.6) とあるように、高慢さを捨てたライオンは、ユーナに対し “a faithful mate / Of her sad troubles and misfortunes hard” (iii 9.3-4)、“her faithful guard” (iii 43.3) となり、第 3 歌の間、ユーナを守る存在となる。「高慢の館」が、「神聖の館」と対比されていることから明らかなように、‘pride’ は、‘holiness’ の対極にあるものであり、「神聖の館」の門番が、謙讓 ‘humility’ の化身ヒュミルタであることから、‘holiness’ に至る最初の過程として、‘pride’ を捨てて、ユーナに対して ‘faithful’ であることが必要であると推測しても良いだろう。以上より、ユーナに選ばれ、武器に象徴される神の恩寵を纏い、‘faithful’ である状態が、赤十字の騎士のあるべき状態と言えるだろう。しかし、赤十字の騎士は、実際は、魔術師アーキメイゴーの罠にはまり、早くも第 1 歌においてユーナを見捨てて、置き去りにしてしまう。“Right faithful true he was in deed and word” (i 2.7) とは、とても言えない。赤十字の騎士は、選ばれた者であるものの、最初は、あるべき姿を体現してないと言えるだろう。

では、いつ「神聖」を体現するといえるのか。まず ‘holiness’ というものを考える前に、形容詞 ‘holy’ にも注意を払いたい。形容詞 ‘holy’ は、序歌にミューズへの呼びかけとして、“Helpe then, O holy virgin chiefe of nyne” (Proem 2.1) と出てくるのが、最初であるが、それ以降、話の前半において、アーサーによる救済までは、‘holy’ は、悪役側の説明において出てくるのだ。まずは、隠修士のふりをした魔術師アーキメイゴーが、赤十字の騎士の噂になっている冒険がないかという質問への返答の中で、“With holy father sits not with such things to mell” (i 30.9) と答えている。アーキメイゴーが住む庵のそばには、“an holy chappell” (i 34.5) が建っており、彼が朝夕にする祈祷は、“His holy things” (i 34.7) と書かれている。

また、その次に ‘holy’ が見られるのは、第 3 歌にて、教会泥棒のカークラパンが盗む対象物の説明においてである。カークラパンは、“The

holy Saints” (iii 17.5) の像から衣服をはぎ取り、保管の甘い聖器 “the holy things” (iii 17.8) を盗む。さらに巨人オーゴリーオの所有するドラゴンは、“The sacred things, and holy heastes foretaught” (vii 18.7) を踏み にじり、巨人の城の中には、“holy Martyres often doen to dye” (viii 36.4) の祭壇がある。これら ‘holy’ なものは、悪役側に脅かされる対象である。

さらには、アイロニカルな意味合いを含むものすらある。無知の擬人化であり、巨人オーゴリーオの養父であるイグナロは、“His reuerend heares and holy grauitee” (viii 32.1) を持つが、見かけ倒しの、何も知らない無知な老人である。さらには、「高慢の館」にて、七つの大罪の一つであり、高慢の女王ルーシフェラに仕える六人の顧問官の一人であるアイドルネス(怠惰)は、“an holy Monck, the seruice to begin” (iv 18.9) に似ていると書かれている。以上の例より、話の前半において、形容詞 ‘holy’ は貶められていると言えるだろう。

一方、話の後半、赤十字の騎士が、アーサーにより救出された後には、形容詞 ‘holy’ には、否定的意味づけがないように思える。赤十字の騎士は、「神聖の館」で、慈悲の化身であるマーシーから、“holy righteousness” (x 45.9) のもとで暮らす術を学ぶ。また、マーシーに導かれ、コンテンプレーション(瞑想)の元に行くまでには、“an holy Hospitall” (x 36.1) がある。また、このコンテンプレーションは、“an aged holy man” (x 46.5), “the holy aged man” (x 59.1) と形容され、赤十字の騎士からも、“holy Sire” (x 67.1) と呼びかけられる。最後には、ドラゴン退治を終えた赤十字の騎士とユーナが婚約する際には、“holy water” (xii 37.5) を使って、二人の間に “holy band” (xii 26.6), “the holy knotts” (xii 37.1) が結ばれたと記述してある。以上より、アーサーによる救済を起点として、形容詞 ‘holy’ がその聖性を回復したと言っても差し支えないだろう。これらを踏まえ、赤十字の騎士が、いつ、どのような「神聖」を体現するようになるのか、確認していきたい。

II

赤十字の騎士は、ユーナの元を離れた後、House of Pride の存在から分かるように、‘holiness’ に対置される ‘pride’ で形容される悪役との邂逅を経て、その身をどんどん貶めていく。まずは、サラセン人の、‘faithless’ の意の名を持つサンズフォイ、“proud Sarazin” (ii 25.1) と戦うが、その際 “two rams stird with ambitious pride” (ii 16.1) とあるように、比喩で同列に扱われており、赤十字の騎士が、‘faithless’ の化身である

人物と同じレベルにまで身を落としていることが窺われる。魔女デュエッサに誘われ、「高慢の館」に赴くが、デュエッサは、“the proud *Duesssa*” (viii 6.1, viii 13.1) と書かれている人物である。「高慢の館」(house of Pride)の女主人ルーシフェラは、当然のことながら、「高慢」の化身であり、“proud *Lucifera*” (iv 12.1, iv 31.9)、“proud *Lucifer*” (iv 37.6) もしくは “*dame Pryde*” (v 45.2) と形容されている。「高慢の館」を抜け出した後、デュエッサと快楽に耽る赤十字の騎士を襲撃する巨人オーゴリーオも、“*Gyaunt proud*” (vii Arg. 2) と書かれている。また、襲撃を受けた際、赤十字の騎士は、“Disarmed all of yron-coted Plate” (vii 2.8) であり、“*Ere he could his armour on him dight, / Or get his shield, his monstrous enemy / With sturdie steps came*” (vii 8.1-3) とあるように、鎧を着け、盾を取ることは出来なかった。以上から、赤十字の騎士は、武具に象徴される神の恩寵を手放してしまったように思われる。

ただしここで重要なのは、墮落してしまった赤十字の騎士は、なおも「天の恩寵」‘*heavenly grace*’の中にあることだ。巨人に打ち倒された時、“*were not heauenly grace, that him did blesse, / He had beene pouldred all, as thin as flowre*” (vii 12.3-4) とあるように、「天の恩寵」故に、赤十字の騎士は死を免れている。また、第8歌の冒頭で、作者のコメントとして次のように書かれている。

AY me, how many perils doe enfold
 The righteous man, to make him daily fall?
 Were not, that heauenly grace doth him vphold,
 And stedfast truth acquite him out of all.
 Her loue is firme, her care continuall,
 So oft as he thorough his own foolish pride,
 Or weaknes is to sinfull bands made thrall:
 Els should this *Redcrosse* knight in bands haue dyde,
 For whose deliuerance she this Prince doth thether guyde. (viii 1.1-9)

ユーナは、“*Forsaken Truth*” (iii Arg. 1) と描写されるように「真理」である存在なので、この “*stedfast truth*” (viii 1.4) は、ユーナのことである。よって、この第8歌の冒頭からは、‘*heavenly grace*’とユーナの愛は、変わることなく赤十字の騎士に向けられていることが分かる。さらに、ユーナの顔は、“*such heauenly grace*” (iii 4.9) とあるように、「天の恩寵」そのものでもあるとされている。従って、「天の恩寵」たる顔を持つユーナ本人も、「天

の恩寵」を象徴すると考えて良いだろう。以上から赤十字の騎士は、「天の恩寵」そのものであるユーナに見捨てられないことによって、常に「天の恩寵」の中にあると言えるのだ。

巨人オーゴリオのもとで捕らえられている赤十字の騎士を助けるのは、ユーナが連れてきた、アーサーである。アーサーが、ユーナの導きの元に赤十字の騎士を助ける存在であることは、第 8 歌の序文においても、“*Faire virgin to redeeme her deare / Brings Arthure to the fight*” (viii Arg. 1-2) とはっきりと述べられている。アーサーが、赤十字の騎士を救出することは、他にも “*As this good Prince redeemd the Redcrosse knight from bands*” (ix 1.9) のように言及されている。「天の恩寵」そのものであるユーナに導かれたアーサーも、神の恩寵の化身であるといえるであろう。以上から、アーサーによる救済から「神聖」への道が始まると言ってもよいだろう。

ただし、赤十字の騎士がようやくたどり始めた「神聖」への道は、まだ多くの困難をはらんでいる。アーサーと別れた後、絶望の化身であるデスペアーに相対した際、彼の弁舌により、自らの罪に絶望した赤十字の騎士は自殺しようとするのだ。赤十字の騎士が、自殺を止めるのは、ユーナの叱責によってである。以上から、赤十字の騎士は、聖人となるべき人間であっても、ユーナの存在なしには、言い換えると「天の恩寵」なしには、「神聖」の獲得へと進むことが出来ないことは確かである。また、赤十字の騎士が絶望に打ち負かされそうになることは、この騎士が、いまだ ‘faith’ を欠いていることも示すものである。信仰を欠く者は、絶望に打ち負かされると、第 7 歌のユーナとアーサーの会話において、アーサーが以下の様に、言明している。“*Despaire breeds not (quoth he) where faith is staid*” (vii 41.7)。この ‘faith’ が重要であることは、第 1 巻において、たびたび言及されている。第 1 歌において、迷妄の洞穴にて、赤十字の騎士が、エラー(迷妄)によって、負かされそうになった時、ユーナが “*Now now Sir knight, shew what ye bee, / Add faith vnto your force, and be not faint*” (i 19.2-3) と叫んだことで、赤十字の騎士は、エラーを倒すことが出来た。また第 5 歌では、赤十字の騎士は、敵のサラセン人サンズジョイ(‘joyless’ の意)を、“*quickning faith*” (v 12.3) によって倒している。また、ユーナが、アーサーに過去のドラゴン退治が失敗したことを説明する際に、前の騎士達が負けた理由として “*for want of faith, or guilt of sin*” (vii 45.8) と述べている。以上より、使命の達成、つまり、ドラゴン退治のためには、選ばれた赤十字の騎士は、‘faith’ を持っていることが不可欠であることが分かる。

デスペアーのもとで、信仰を欠いていることが露呈した赤十字の騎士も、以下のユーナの台詞から、いまだ神の慈悲の内にあることが分かる。

Come, come away, fraile, feeble, fleshly wight,
Ne let vaine words bewitch thy manly hart,
Ne diuelish thoughts dismay thy constant spright.
In heauenly mercies hast thou not a part?
Why shouldst thou then despeire, that chosen art?
Where iustice growes, there grows eke greter grace,
The which doth quench the brond of hellish smart,
And that accurst hand-writing doth deface,
Arise, Sir knight arise, and leaue this cursed place. (ix 53.1-9)

ここで注目したいのが、Thirty-nine Articles に代表されるような、プロテスタントの思想との関連である。Thirty-nine Articles は、1563年に主教会議 (Convocation) を通り、1571年に英国議会が The Subscription (Thirty-nine Articles) Act を可決した後、全ての聖職者 (clergy) が聖職禄を得る際に、宣言するようになったものである⁴。カルロス・M・N・エール (Carlos M. N. Eire) の指摘するように、英国民が持つべき信仰の核を列挙したものである Thirty-nine Articles は、プロテスタントの主義を主としており、予定説などの考えが見られるが、正確さをばかしたものになっている (Eire 343)。『妖精の女王』との関わりでは、アンドリュー・キングも、カルヴァンの救済の理論が見られることを指摘した後、Thirty-nine Articles の項目にのっとして解釈している (King 126-45)。また、ジェームズ・W・ブローダスが、赤十字の騎士のあり方は、カルヴァンの思想にのっとして理解できるものである指摘している (Broaddus 587-600)。コリン・バロウ (Colin Burrow) が指摘するように、スペンサー自身が、イギリスのプロテスタント教会の継続的改革を望む者達のパトロンであったレスター伯の、急進のプロテスタント政策に生涯を通じて強い好意を示していたことを踏まえても、赤十字の騎士に、強いプロテスタント的解釈を読み込んでよいだろう (バロウ 35)。ここでは、キングのように、Thirty-nine Articles にのっとして解釈して見たいと思う。まず、Article X の「自由意志」に関して、見てみたい。

⁴ 引用は 1702 年版に基づく。

X Of Free-will

The condition of man after the fall of Adam, is such, That he cannot turn and prepare himself by his own natural strength and good works to faith and calling upon God: Wherefore we have no power to do good works pleasant and acceptable to God, without the grace of God by Christ preventing us, that we may have a good will, and working with us when we have that good will. (*Thirty-nine Articles*, Article X)

Article Xにおいて、「神の恩寵があつて初めて、人は信仰を持ち、内なる呼びかけに答え、善行を成し遂げられる」とある通りに、赤十字の騎士が、ドラゴン退治の善行を成し遂げられるとすれば、それは、「天の恩寵」たるユーナの導きによって、信仰を持ち、内なる呼びかけに答えることが出来るからなのである。つまり、ユーナという存在がなければ、赤十字の騎士が、神に認められる善行をなすことは、あり得ないのだ。以上からも、ユーナの重要性が伺える。

さて、デスペアーのもとを脱した後、ユーナは赤十字の騎士を「神聖の館」へと導く。「神聖の館」の入り口は前述のように、謙譲の化身であるヒュミルタが門番である。次に「神聖の館」で挨拶を交わすのは、館の女主人である‘heavenly’を意味する名前のシーリアである。赤十字の騎士とユーナを寝床に連れて行くのはオビイーディエンス(従順)である。次に「神聖の館」で、赤十字の騎士は、シーリアの娘であるフィデリア(Fidelia, ‘faith’の意)から、精神的教えを受ける。これも、ユーナがフィデリアに頼んだからである。ユーナは、フィデリアに、赤十字の騎士が“her heavenly learning” (x 18.5) と “the wisdom of her wordes diuine” (x 18.6) が学ぶことが出来るよう頼む。フィデリアは、“graunted, and that knight so much agraste, / That she him taught celestiall discipline, / And opened his dull eyes, that light mote in them shine” (x 18.7-9) とあるように、赤十字の騎士に喜んで天の掟を教える。「天の恩寵」であるユーナの取りなしによって、赤十字の騎士は、正しい信仰に基づいた心を育むことが出来たのだ。ただ、この際、スペランザ(Speranza, ‘hope’の化身)がいなければ、絶望故に赤十字の騎士は、“all, that *Fidelia* told” (x 22.5) を忘れてしまっただろうと書かれている。フィデリアとスペランザは、“Loe two most goodly virgins came in place, / Ylinked arme in arme in louely wise” (x 12.2-3) とあるように、常に一緒にいるとされている。この二度目の絶望は、一度目の絶望と同じように解釈されることも多い。しかしながら、ジェームズ・W・ブローダスの意見では、この絶望は、カルヴァンの言うところの「罪深い人

間であるので死を望むのは当然であるゆえの絶望」であり、なおかつその上で、神に委ねるべきであることを示していると主張している (Broaddus 589-90)。本論でも、ブロードダスの意見に従い、赤十字の騎士のこの描写は、神の恩寵によって得た信仰がある故に絶望しても、神の意志に身を委ねて希望を持つべき様を示すと考える。

神の恩寵によって信仰を確かな物にした赤十字の騎士が、この次に行うのは、改悛 ‘repentance’ である。この改悛は、第 10 歌の要旨に、“house of Holinesse, /Where he is taught repentaunce” (x Arg. 2-3) と書いてあることから、重要な過程であると伺える。赤十字の騎士が、改悛を行うべきなのは、まだ “proud humors to abate” (x 26.2) を持っている、つまり、本論の中において考えるところの、「神聖」に向かう第一の条件である「謙譲」「高慢を捨て去ること」が出来ていないためであると考え。ユーナは、ペイシェンス(「忍耐」Patience)、ペナンス(「苦行」Penance)、リモース(「呵責」Remorse)、リペンタンス(「改悛」Repentance)の元へ、赤十字の騎士を連れて行く。赤十字の騎士が、体験するのは、以下の様な改悛の過程である。

And bitter *Penaunce* with an yron whip,
Was wont him once to disple every day:
And sharpe *Remorse* his hart did prick and nip,
That drops of blood thence like a well did play;
And sad *Repentance* vsed to embay
His blamefull body in salt water sore,
The filthy blottes of sin to wash away.
So in short space they did to health restore
The man that would not liue, but erst lay at deathes dore. (x 27.1-9)

この後、“Whom thus recouer’d by wise Patience, And trew *Repentaunce* they to *Vna* brought” (x 29.1-2) とあるように、改悛に導かれて、赤十字の騎士は、ユーナへの目通りを許される。Thirty-nine Articles においても、改悛というものは認められるとはっきり書かれている。Article XVI において、洗礼後に罪を犯した者の改悛は否定されないと書いてある。

XVI Of Sin after Baptism

Not every deadly sin willingly committed after Baptism, is sin against the Holy Ghost, and unpardonable. Wherefore the grant of repentance is not to

be denied to such as fall into sin after Baptism. After we have received the holy Ghost, we may depart from grace given, and fall into sin, and by the grace of God (we may) arise again, and amend our lives. And therefore they are to be condemned, which say they can no more sin as long as they live here, or deny the place of forgiveness to such as truly repent. (*Thirty-nine Articles*, Article XVI)

その後、赤十字の騎士は、ユーナによって、シリアの娘のチャリッサ (Charissa, ‘charity’ の化身) の元に連れて行かれる。ユーナは、チャリッサに、苦行を乗り越えた赤十字の騎士を、“her vertuous rules” (x 32. 6) において教えて欲しいと頼む。ここでも、「天の恩寵」たるユーナの取りなしによってこそ、赤十字の騎士は、“when him she well instructed hath, / From thence to heauen she teacheth him the ready path.” (x 33.8-9) とあるように、チャリッサから天への道の教えを得る。

チャリッサの教えの後、赤十字の騎士は、慈悲の化身であるマーシーに導かれ、丘の上に住む、天のエルサレムに至る道を知るコンテンプレーション(瞑想)を尋ねる。このマーシーは、先ほども見た天の慈悲であり、彼が “neuer fall” (x 34.7) であるようにと、助けてくれる存在である。“That hill they scale with all their powre and might, / That his fraile thighes nigh weary and fordonne / Gan faile, but by her helpe the top at last he wonne” (x 47.7-9) とあるように、このマーシーの助けがなければ、騎士は丘の上にとどり着くことは出来なかった。また、“And had he not that Dame respected more, / Whom highly he did reuerence and adore, / He would not once haue moued for the knight” (x 49.4-6) とあるように、マーシーがいなければ、コンテンプレーションが騎士に “Great grace” (x 47.1) を与えることはなく、また、フィデリアが、“shee doth thee require, / To shew it to this knight” (x 50. 8-9) とあるように命令しなければ、コンテンプレーションが天のエルサレムを赤十字の騎士に見せることはなかった。以上より、神の恩寵に支えられた信仰と、神の慈悲があつてこそ、瞑想が神に通じると言えるだろう。

赤十字の騎士が、神に通じたことで、神の恩寵を示す武具は輝き始める。始め、迷妄のところでは “his glistring armor made / A litle glooming light, much like a shade” (i 14.4-5) であった武具は、“Those glistring armes, that heauen with light did fill” (xi 4.8) と書かれている。また、第11歌において、語り手が “this man of God his godly armes may blaze” (xi 7.9) であるように歌えるようにと言っている。このように、「神聖の館」で

の経験を通し、赤十字の騎士は、高められた状態になった。しかし、まだ赤十字の騎士は「神聖」を体現するには、至っていない。「天の恩寵」たるユーナから、最初に与えられた使命を果たさなければならない。

III

赤十字の騎士は、最初にユーナから与えられた使命であるドラゴン退治へと向かう。ドラゴンも “with outrageous pride” (xi 53.3) とあるように、‘holiness’ に対置される ‘pride’ に属する存在である。戦いの中で、赤十字の騎士は、幾度も危機に見舞われる。馬から落ち、立ち上がった騎士は、ドラゴンに火を吹きかけられ、神の恩寵の印である武具を取り去りたく感じる。

The scorching flame sore swinged all his face,
And through his armour all his body seard,
That he could not endure so cruell cace,
But thought his armes to leaue, and helmet to vnlace. (xi. 26. 6-9)

この危機に対し、「命の泉」“*The well of life*” (xi 29.9) に落ちることで、赤十字の騎士は、危機を脱する。この泉は、“guilt of sinfull crimes cleane wash away” (xi 30.2) という機能を持つ。次の日の朝、赤十字の騎士は、“So new this new-borne knight” (xi 34.9) として、泉から立ち上がる。作者のコメントでは、以下の様に述べられている。

I wote not, whether the reuenging steele
Were hardned with that holy water dew,
Wherein he fell, or sharper edge did feele,
Or his baptized hands now greater grew;
Or other secret vertue did ensew; (xi 36.1-5)

ここで「洗礼」のテーマが出てくる。Thirty-nine Articles においては、次のように書いてある。

Article XXVII Of Baptism

Baptism is not only a Sign of Profession, and Mark of Difference, whereby Christian men are discerned from others that be not Christned: but it is also a Sign of Regeneration or New Birth, whereby as by an instrument, they that

receive Baptism rightly, are grafted into the Church: the promises of the forgiveness of sin, and of our adoption to be the Sons of God by the Holy Ghost, are visibly signed and sealed : faith is confirmed, and grace increased by virtue of Prayer unto God. The Baptism of young Children is in any wise to be retained in the Church, as most agreeable with the Institution of Christ. (*Thirty-nine Articles*, Article XXVII)

「命の泉」の効能から考えても、この洗礼は、再生の印だけでなく、罪の許しの印でもあり、赤十字の騎士は、聖霊によって神の御子の一人になったと考えることは可能であろう。ジェームズ・W・ブローダスは、自発的な洗礼でないとの問題提起をしている (Broaddus 599)。しかし、この洗礼も、信仰と同様、神の意志による、神の恩寵によってこそ可能な物だと捉えるべきであろう。

この後、力を新たにした赤十字の騎士は、しかしながら、なおも苦戦を強いられる。ドラゴンの爪が、彼の盾、つまり「エフェソの信徒への手紙」の6章16節の比喩において、信仰を示す盾を、“Quite through his shield” (xi 38.6) とあるように、完全に貫くのだ。さらに、ドラゴンは、神の恩寵を受けて輝く “his sunne-bright shield” (xi 40.9) を奪い取りかけ、その上、天の光をかき消す炎 “Huge flames, that dimmed all the heuens light” (xi 44.3) を吐く。ここでまた、神からの助けが与えられる。赤十字の騎士は、「命の木」“The tree of life” (xi 46.9) からしたたる香油の中に倒れ込むが、それは、“It chaunst (eternall God that chaunce did guide)” (xi 45.6) とあるように、神の導きによるものである。「命の木」は、以下の様な説明が成されている。

There grew a goodly tree him faire beside,
Loaden with fruit and apples rosy redd,
As they in pure vermilion had beene dide,
Whereof great vertues ouer all were redd:
For happy life to all, which thereon fedd,
And life eke euerlasting did befall:
Great God it planted in that blessed stedd
With his Almighty hand, and did it call
The tree of life, the crime of our first fathers fall. (xi 46.1-9)

また、「命の木」の効能として “Life and long health that gracious ointment

gaue, / And deadly wounds could heale” (xi 48.5-6) とある。ここでもまた、赤十字の騎士は、神の恩寵によって、気力を回復し、傷を治すことが出来るのだ。この後、三日目に、とうとう赤十字の騎士は、ドラゴンを倒す。このドラゴンを倒す行為こそが、‘good work’ である。神の導きがあつてこそ、赤十字の騎士は、とうとう善行をなすことが出来たのだ。赤十字の騎士が、三日の戦いの後に、サタンの化身たるドラゴンを倒したことは、キリストの地獄征服の行いを想起させる物として、解釈される物である。また、アンドリュー・キングの言うように、この赤十字の騎士は、Thirty-nine Articles の Article XI が表されたものであると考えられる (King 137)。

XI Of the Justification of Man

We are accounted righteous before God, only for the merit of our Lord and Saviour Jesus Christ by faith, and not for our own works of deservings. Wherefore, that we are Justified by faith only is a most wholsom Doctrine, and very full of comfort, as more largely is expressed in the Homily of Justification. (*Thirty-nine Articles*, Article XI)

『妖精の女王』においても、“That thorough grace hath gained victory. / If any strength we haue, it is to ill, / But all the good is Gods, both power and eke will” (x 1.7-9) と書かれており、また、“Where iustice growes, there grows eke greter grace” (ix 53.6) とある。つまり、神の力によってのみ、この使命は果たされたのであり、赤十字の騎士の偉業というわけで無いのだ。ブロードスは、赤十字の騎士が、ドラゴンに「神の言葉たる霊の剣」を突き刺し、倒したその瞬間に、一時的に “a true servant of God clad in ‘the armour of a Christian man’” になったのだと述べている (Broaddus 601)。以上より、神より与えられた使命を果たし、キリストの似姿となり、神の意志を遂行した赤十字の騎士は、「神聖」というものを獲得したと言えるだろう。

この後、赤十字の騎士は、本文中で “her faithfull knight” (xi 55.8) とようやく呼ばれる。戦いの後に、真の意で ‘faithful knight’ になった赤十字の騎士は、「神聖」を体現する騎士の持つべき性質を遂に獲得したのだ。そのため、ユーナは、“such heauenly grace” (iii 4.9) である彼女の顔を今まで覆っていたベールを取り去り、赤十字の騎士は、遂に、ユーナの顔を目の当たりにする。

For she had layd her mournfull stole aside,

And widow-like sad wimple throwne away,
Wherewith her heauenly beautie she did hide,
Whiles on her wearie iourney she did ride; (xii 22.2-5)

赤十字の騎士が、今まではベール越しでしか見られなかったユーナの顔を、遂に目の当たりにすることは、すなわち、自身を今まで導いてきた「天の恩寵」というものを、初めて正しく認識するということに他ならない。そのため、赤十字の騎士は、ユーナの顔の“her celestiall sight” (xii 23.8) を見て驚く。さらにまた、ユーナの真の‘faithful knight’ になったことで、ユーナとの間に婚約という“holy band” (xii 26.6)、“the holy knots” (xii 37.1) を結ぶことを許されるのだ。赤十字の騎士は、神の恩寵のもと、「神聖」の騎士となることを、遂に許されたのだ。

結び

イングランドの守護聖人たる赤十字の騎士が、エリザベス朝期のイングランドで聖性を得るには、従来のカトリック的「神聖」に加え、プロテスタントの考えにのっとったあり方で、神の恩寵を通して、ドラゴン退治という善行をなすことで、義とされ、プロテスタント的「神聖」を獲得することが出来たのではないだろうか。「神聖の館」は、その存在自体で完結した「神聖」を持つが、プロテスタント国家となったイングランドたる赤十字の騎士が、「神聖の館」の経験だけでは、「神聖」に達するには不十分であったと言えるのではないだろうか。

また、「天の恩寵」たるユーナの存在も、忘れることは出来ない。赤十字の騎士が、「神聖」を体現することになるのは、そもそもが、ユーナに、ドラゴン退治という神から与えられた使命を果たすために、選ばれたからである。そして、赤十字の騎士を助けるためにアーサーを連れてきたのも、絶望から赤十字の騎士を連れ出したのも、「神聖の館」で騎士が教えを得られるように取りなしたのも、赤十字の騎士が「神聖」に至る過程を支え続けたのは、ユーナである。「一」の意味である名前のユーナは、“Forsaken Truth” (iii Arg. 1) などと描写されているように、‘truth’ として描かれる人物であり、‘true church’ として解釈されてきた人物である。ジェームズ・W・ブローダスは、ユーナは、“embodiment of Christian charity” であると主張している (Broaddus 602)。だが、一にして真実であり、‘heavenly grace’ たる顔を持つユーナは、「天の恩寵」そのものであるといえる存在である。つまり、ユーナという存在が与えられたことこそが、神の恩寵の印であるといえるのではないだろうか。以上より、ユーナは、神の

恩寵そのものを象徴し、神の代理人そのものであると言えるのではないだろうか。神に選ばれ、神の恩寵に支えられ、信仰を持ち、キリストに重なる行いをするところこそが、『妖精の女王』第 1 巻において、「神聖」を体現することと言えるのではないだろうか。

引用文献

- Broaddus, James W. “Spenser’s Redcrosse Knight and the Order of Salvation.” *Studies in Philology*, vol. 108, no. 4, 2011, pp. 572-604. *Project MUSE*, <https://doi.org/10.1353/sip.2011.0024>. Accessed 22 Dec 2017.
- Church of England. *Articles agreed upon by the archbishops and bishops of both provinces, and the whole clergy, in the convocation holden at London in the year 1562. For the avoiding of diversities of opinions, and for the establishing of consent touching true religion. Reprinted by His Majesties commandment, with his royal declaration prefixed thereunto.* 1702. *Eighteenth Century Collections Online*, <https://m.kulib.kyoto-u.ac.jp/webopac/EB02802855>. Accessed 15 Dec. 2016.
- Eire, Carlos M. N. *Reformations: The Early Modern World, 1450-1650*. Yale UP, 2016.
- King, Andrew. *The Faerie Queene and Middle English Romance: the Matter of Just Memory*. Oxford UP, 2000.
- Spenser, Edmund. *The Faerie Queene*. Edited by A. C. Hamilton, Longman, 1977.
- . *The Faerie Queene*. Edited by A. C. Hamilton, 2nd ed., Routledge, 2013.
- . *Edmund Spenser’s Poetry: Authoritative Texts, Criticism*. Edited by Hugh Maclean and Anne Lake Prescott, 3rd ed., W. W. Norton, 1993.
- バロウ, コリン. 『スペンサーとその時代』 小田原謠子訳, 南雲堂, 2011 年.
- マール, エミール. 『中世末期の図像学 下』 田中仁彦, 池田健二, 磯見辰典, 平岡忠, 細田直孝訳, 国書刊行会, 2009 年.
- スペンサー, エドマンド. 『妖精の女王: 韻文訳』 福田昇八訳, 九州大学出版会, 2016.
- 竹村はるみ. 「赤十字の騎士と消えた聖人の行方」『詩人の詩人スペンサー: 日本スペンサー協会 20 周年論集』 日本スペンサー協会編, 九州大学出版会, 2006 年, pp. 21-34.
- 『聖書 新共同訳』 日本聖書協会, 2004 年.